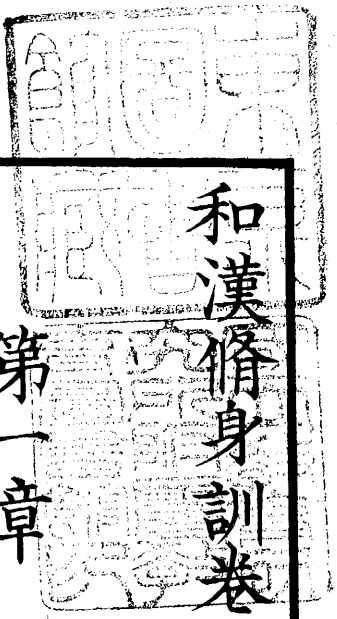


龜谷
行著
和漢脩身訓
三

K110.1
37
3



和漢脩身訓卷三

第一章

龜谷行著

○三綱とある何ぞや。君臣父子夫婦を謂ふなり。君と臣の綱とあり。父と子の綱とあり。夫と妻の綱とあり。白虎通

○人の禽獸と異なるゆゑ人の者

口業齋身訓
卷三
一
七風土成版

ハ。倫理のこ。何をう倫と謂ふ。父子君臣夫婦長幼朋友五者の倫序是

あり。明丘瓊山戒子書

○人の實學ハ。五倫上より做し起

まことを要に。傳家寶

○父子親あり。君臣義あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。孟子

○孝ハ百行の本あり。故小人と志て孝あらず。其本先づ絶ち。他の善行良才ありと雖も。觀るは足

らぬ。具原益軒語

○父母は對してハ。色を和げ。氣を下し。温和を主として事ふる。貝原

家道訓

○病て牀に卧し。之を庸醫も委ぬるは。不慈不孝に比て親も事ふ難者也。亦醫を知らざるべからば。程伊

語川

第二章

○嘉肴ありと雖も。食まざまば。其旨を知らば。至道ありと雖も。學む

ざまば其善を知らば。禮記

○道近しと雖も。行うざまば。至らば。事小ふりと雖も。為ざまば。成ら

ば。韓詩外傳

○事を勉強に在り。勉強して學問をまきば。聞見博くして。智益明あり。勉強して道を行へば。徳日小起り

て大よ功あり。漢董仲舒語

○學問の道敢て自ら是ありとせぬ。其心を虚くし。人よ受きば。自ら得ることあり。朱子語

○學を為さよむ。須らく今ハ是よし。て。昨ハ非あるを覺ゆべし。日く改め。月に化して。便是長進也。同上

○書を誦を成さざるべからば。或ハ馬上小あり。或ハ中夜寐らまきざる時小在り。其文を詠し。其義を思へば。得る所多し。司馬溫公語

○學を為さよむ。先づ志を立つ。志既よ立てば。學問次第よ力を著く。志を立ると定まらざら

社バ。終又事を濟さず。朱子語

○讀書も首として。志を立つるを

要に。志を立つるハ。堅を貴ぶ。堅く

して恒るまば。其學必成る。讀書心法

○有志の士も。利刃の如し。百邪辟

易に。無志の人も。鈍刀に如し。童蒙

侮翫に。佐藤一齋語

○人事百般。を處て遜讓を要に。但

志ハ師小讓らざるべく。又古人も

讓らざるべく。同上

○盛年も重て來らば。一日も再び

晨あり難し。時小及びて。當又勉勵

まべし。歲月ハ人を待はず。晋陶淵明詩

○朝も志て食もさまば。晝ふして

饑急少くして學バざまバ。壯ふて惑ふ。饑る者猶忍ふべし。惑ふ者も奈何ともを極からば。佐藤一齋語

第三章

○凡諸の卑幼事大小とあく。専ら又行ふことを得る母を。必ず家長よ咨稟せよ。司馬溫公語

○凡兒童ハ。須らく是衣冠整齊。言動端莊あるべし。庶耻の二字を識り得まバ。自然又正大光明の氣象あり。言行彙纂



陶淵明先生

○凡宴會賓客雜坐ハ。質疑問難の時。又非必。詩文を講説志。自ら博雅を誇る。慮うらば。恐らくハ知らざる者。之を恨まらん。金言

○人の書籍を翻へ。人の書案を塗り。人の花木を折り損ふ。みな人よ厭むる。の事あり。竊く人の

篋中の字跡を窺ふ。尤モ不可あり。

金言

○人の私語を見て。耳を傾け竊く聴く勿き。人此私室ふ入り。目をそむよて。旁觀せらる勿き。願體集

第四章

○言語を慎み。以て其徳を養ひ。飲

食を節よし。以て其體を養ふ。事の至近ふして。繋る所至大あるハ。言語飲食小過ぐるハ莫し。程子語

○食を節よし。これバ疾ふし。言を擇ぶむ禍ふし。禍の生ぜる。天より降る小あらば。皆其口より西疇常言

○人乃惡を稱する者を惡し。下流よし居て。上を誣る者を惡む。孔子語

○是の邑よし居て多。其大夫を非ら子貢語

○人を傷るの言ハ矛戟より甚し。況や紙筆よし形を荀子

○一坐の中。好て言を以て人を彈射する者あらば。吾宜く端坐沉默

一。以て之を銷せ。塵一。此を不言の
教と謂ふ。願體集

○人の聞ごとあきを欲せども。言ふ
勿れ。人の知ることあきを欲せば。
為す勿き。同上

○喜ぶ時。言も。多く信を失ひ。怒
る時の言ひ。多く體を失ふ。傳家寶

○人と約せば。信を失ふこと勿き。
當^ヤ又思ふ。塵一。たび信を失ふも
む。人よることを得むと。大和俗訓

○も。其事。義又協えず。或ハ力及
む。ば。始より約を結ぶ。塵一。ら
ば。同上

○常ふ虚誕を説く者ハ。時ありて。

信誠のふとを言ふとも。人之を信
ぜば。紳瑜

第五章

○善を為死者ハ。天之小報るハ福
を以て。不善を為死者ハ。天之小
報る小禍を以て也。孔子語

○善小善報あり。惡小惡報あり。善

惡報あまハ。時節未ト至らば。事林廣記

○善ハ小ぬして。益ありと謂ふ。處

こうらば。不善ハ小ぬして。傷きあ

しと謂ふ。處こうらば。賈誼新書

○其心厚起者ハ。其福厚し。其量弘
き者ハ。其徳弘し。日計足らば。月計
餘りあり。明吳懷野語

○薄福の者ハ。必ず刻薄あり。刻薄
おれば。福更ハ薄シ。厚德の者ハ。必
ズ寛厚あり。寛厚おれば。徳更ハ厚

シ。
瑜紳

○小人専ら人ハ恩を望む。恩過ぐ
まバ感ぜバ。君子輕く人の恩を受
けバ。受くまバ忘き難シ。同上

○我人ハ功あれば。念ふ忘らバ。
而シテ過ハ。念ハざる忘らバ。人
我ハ恩何まバ。忘るづらバ。而シ
テ怨とむ。忘きバ。忘らバ。同上

○我如シ善を為まバ。一介の寒士
と雖も。人の其徳ハ感ずるあり。我
もハ惡を為まバ。位人臣を極むと

雖も人の其過ヲを議する有り。瑜紳

○一日の中。或ハ一善言を聞き。一

善行を見。一善事を行へば。此日虚

く度らばと云。瑜紳

○晝の為を所ハ。夜必之を思ひ。

善あまきバ樂と。過あまきバ懼る。君子

ふる哉。省心録

○世間第一。敬まべきの人ハ。忠臣

孝子あり。世間第一。憐むべきの人

ハ。寡婦孤兒あり。清魏環 溪語

○人の短を匿はぬ。人の急を去く

まざるハ。仁義の人又非ざるあり。

畜徳録

○君子能く人の危きを扶け。人の

急をまゝくふ。固より是美事あり。誇らざまゝハ益よし。願體集

○人の善を聞て疑ひ。人の惡を聞て信ず。好て人此短を説き。人此長を計らぬ。其人平生惡ありて善あり。同上

○凡、一念惡を思ひ一事惡を行へ

む。天道ふ背く。恐る原。貝原初學訓

第六章

○我を非として當る者ハ。吾が師あり。我を是として當る者ハ。吾の友あり。我よ諂諛をる者ハ。我の賊あり。荀子

○小人固より遠ざくべし。然れど

和漢傳身言 卷三 九

も亦顯む又仇敵とあはれんうらず。君子固より親むん。然きども亦曲て附和をばうらず。願體集

○不肖を以て人を待つ。愚者と雖も甘ぜば。非禮を以て人を處せ。賤者と雖も亦怨む。習是編
○人の詐を覺るも。之を説破さば。

其自ら愧るを待て可あり。若夫此愧を知らざる人ハ。又何ぞ責免ん。金言

○人を感ぜ志むる能ハげるハ。皆誠の未至らざるあり。明薛文清語
○人の小過を責めば。人ハ陰私を發つ。人の舊惡を念とず。三乃者

口業身言 卷三 十四 七風土成反

永澤修身言 卷三 大尾神藏抄

も。惟以て徳を養ふれとあらむ。亦以て害を遠げと慮八。遵生

○古人の是非を品評するハ可かり。今人の善惡を妄議するハ不可あり。恨我取ること。多くハ妄議小

在り。佐藤一齋語

○年高くして徳無く。貧極りて耻

無く。兇惡ぬして禮を顧まじ。愚謬ふして禮我明よせじ。此四等の人を。與又較を慮あらば。習是編

○人我犯うさむることハ易く。人の我を犯せども。報以ざることを

難し。大和俗訓

○天下何事う。怒りふ因て錯らざ

口業身業 十五 七風土歳反

らん。怒れば忙し。忙しけきば錯る。

明陸稼亭語

○莫大の禍ハ。須臾の忍ひざるふ起る。古語

○忍も亦辨あり。勢を畏きて忍ぶ者ハ。忍と為さず足らば。畏るづきの勢あくして忍ぶ。是を真よ忍と

為は。神瑜

第七章

○人小三の不祥あり。幼ふして敢て長よ事へば。賤よ志く敢て貴ふ事へば。不肖ぬして敢て賢よ事へざる。是人の三不祥あり。荀子

○智ある者ハ。問を好て樂こ。智ふ

まき者ハ。自ら用ゐ

て憂ふ。明楊慈湖語

○自ら重んぜざ

る者ハ。辱を取り。

自ら畏まざる者

ハ。禍を招く。自ら

満たざる者ハ。益

伊藤仁齋先生



を受け。自ら足まきりとせざる者ハ。

聞を博く願體集

○人の錯まきる處を見くハ。時々我

身を返り観る明程漢舒語

○一言の過も。莫大の禍とあり。一

事の失も。終身の憂とある。慎まざ

るべからん。大和俗訓

○人遠き慮ありれば。必ズ近き憂あり。孔子語

○名を成さば。毎ニ窮苦の日ニ在り。事を敗るハ。多く得意ニ時ニ因る。紳瑜

○難ク臨マざれば。忠臣の心を見ズ。財ニ臨マざれば。義士の節を見ズ。

す。省心録

○丈夫一生。廉耻を重シとシ。切ク人ニ求ルこと勿キ。死生命あり。續小

見語

○衣垢キきて洗ハ。器缺テ補ハ。人ニ對シて。おほ慙ル色あり。行垢キきて洗ハ。徳缺テ補ハ。天ニ對

して。豈小愧る心無らんや。談樵

○才を猶劍のごとく。善く之を用
おれば。以て身を衛るべし。善く之
を用おれば。以て身を殺すも足

る。佐藤一齋語

○人を害するの心も有るべから
ぬ。人を防ぐの心も無難なからぬ。

願體集

第八章

○人の貴賤を論ぜぬ。一日當り又作
す履きの事あり。若し飽食煖衣し。事
を事とせぬんば。何ぞ好結果ある
を得ん。同上

○儉ハ萬善の本。奢ハ衆惡の基。唯

其身成敗の分るゝ所のこよ非也。
 其家儉ふれば福子孫よ流き奢る
 とまひ禍後嗣ふ傳ふ慎まざる屋
 々伊藤仁齋語也。
 ○家長禮をたまはば男女勤儉衰門
 と雖も亦興る。一時の貧富ハ論を
 るふ足らば紳瑜

○廉士も財を愛せざるゝ非也之
 を取るゝと道ふ由る。古語
 ○信を人よ取まば財の足らざる
 ことあり。佐藤一齋語

仙洲均書

和漢脩身訓卷三終

明治十五年三月廿八日版權免許
 同年五月四日出版
 同年九月十八日再版御届
 同十七年七月七日三版御届

定價金七錢五

東京府士族

光風社長

著者出版人

龜谷行

東京神田金澤町十番地

大阪備後町早中番地

製本

中近堂支店

同 備後町早中番地

發兌

梅原龜七

稟准

東京光風社

明治十四年之冬以後製本以此紙為証



17

行 龜
 著 谷
 和 漢
 續 書
 四

K110.1
 37
 4